

『現代デザイン事典』におけるデザイン史研究方法 論の抽出

賀, 佳

<https://hdl.handle.net/2324/7182468>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士（芸術工学）, 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名 : 賀 佳

論 文 名 : 『現代デザイン事典』におけるデザイン史研究方法論の抽出

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、平凡社『現代デザイン事典』からデザイン史研究の方法論に革新的な手法の導入を探究するものである。

緒言では、デザイン史研究の全般的な背景に深く踏み込み、まず、デザイン史研究の典型的な手法に関する概観を行い、その後、本研究がどのようにデザイン史の文献資料から歴史的な要点を取り出し、その方法を整理することを目的としているのかを明らかにした。この中で、平凡社が発行した『現代デザイン事典』は、その独自の情報量と編纂の質から、デザイン史研究の重要な資料として特別な注目を受けている。

先行研究の章では、デザイン史研究の起源としてのアーツアンドクラフト運動の影響を受けたイギリスデザイン史研究を起点とし、その動向の変化と拡大を網羅的に追跡。イギリスを中心にヨーロッパ全域、そしてアメリカへとその研究が波及し、さらにアジア、特に日本や中国にも影響を及ぼしていることを明らかにした。この過程で、各地域や時代の特有のデザイン思潮や文化的背景の影響、有名な作家や著作を紹介し、その研究の多様性と深さを強調している。

第3章で、重点的に扱われる平凡社による『現代デザイン事典』の詳細を展開した。事典の各部分の構造や内容を見直し、毎年の「本項目」「コラム」「特集/クローズアップ」の変動やその内容を詳しく調査した。この調査を通して、事典の総体的な進展や、特に4度の大規模な改訂を通じての変化を具体的に理解することができた。さらに、この伝統的なアプローチだけでは、デザイン史の深い層を明らかにするのが難しいとの結論に至った。結論として、平凡社の事典を用いて日本の平成時代のデザイン史の新しい側面を浮き彫りにし、伝統的な文献研究方法の限界を認識し、新しい研究アプローチの導入が不可欠であることが明らかになっている。

この認識を基に、革新的な研究手法としてテキストマイニングの導入を提案した。テキストマイニングの基本的な手法や他分野での成功例を紹介し、第4章は、デザイン史の研究手法としてのテキストマイニングの可能性を探究するものとして展開する。初めに、テキストマイニングの基礎的概念、分析のプロセス、そして他分野での適用事例を簡潔に説明した。テキストマイニングは、大量のテキストデータから関連性やパターンを見出し、その中から有意な情報や新たな知見を抽出するための先進的な分析技術である。特に、この技術が他の学際的な分野、例えば経済学や社会学でどのような実績を持つのかについて説明する。これらの背景情報をもとに、テキストマイニングがデザイン史の研究に対しても効果的であるとの予測を提案した。

この仮説を検証するため、日本の学術論文データベース **Cinii Article** を活用して、「デザイン史」

に関する論文に焦点を当てて調査を行った。この調査から、テキストマイニングを利用して近年のデザイン史の研究トレンドを詳しく知ることができることが示された。特に近年キーワードの抽出で、近年デザイン史研究の主題変遷を把握した。この章を通じて、デザイン史研究にテキストマイニングを採用する利点を実証した。

さらに、第 5 章において、『現代デザイン事典』に対してテキストマイニングの手法を適用し、詳細な分析を実施している。以前の第 3 章で詳述した事典の変遷を基盤とし、テキストマイニングを通じて事典から得られる新規の視点や情報を精緻に明らかにしている。この方法論を採用することにより、デザイン史に関する未知の側面や知識を浮き彫りにすることが実現された。具体的には、『現代デザイン事典』におけるテキストデータを中心に研究活動が進行され、テキストマイニング技術の適切な利用法を模索し、その結果として新しい知識や視点を獲得することができた。さらに、この章で得られたテキストマイニングによる洞察と第 3 章での伝統的な文献研究手法の結合を提案しており、この統合的なアプローチがデザイン史研究に新たな方向性を提供する可能性を示唆している。

最終章では、この研究で提案された新しい方法論の意義や貢献、そして今後のデザイン史研究の方向性について議論されている。特に、従来の研究方法と新たに提案されたテキストマイニング分析手法の導入を組み合わせることで、デザイン史の多様な側面や深層を明らかにすることができるとの結論に至った。

全体として、本論文はデザイン史の研究手法の更新という視点から、新たな分析技術の導入の必要性和その有効性を実証し、デザイン史研究の新たな方向性を提示している。